

Passions 論への手がかり (2) — Concupiscence 論の系譜

Esquisse préparatoire à un traité des passions (2)

—Une filiation générale des traités de la concupiscence

徳村 佑市

1. Passions (情念) と Concupiscence (情欲)⁽¹⁾

はじめに passions を複数形で表示し、concupiscence を単数形で表示した理由にふれておかねばならない。「情念」というとき、我々は、愛とか憎しみとか、さまざまな情念を思いうかべる。たとえば聖トマス・アクィナス (1225—1274) は、passions を concupiscible なものと irascible なものにわけ、concupiscible な passions として6つのもの、irascible な passions として5つのもの、合計11の passions をあげている⁽²⁾。フランスの17世紀のモラリストたちは、この聖トマスの例にならって、この分類法を踏襲したり、発展させたりしているので、「情念」という場合、そのすべてを含むものとして、passions という風に複数形で思いうかべるのが、自然であると思う。もっとも愛とか憎しみとかという個々の情念をさす場合には、passion という風に、単数形で表わすのであるが。これに対して concupiscence (情欲) という場合には、単数形で表示することが多いようである。というのは concupiscence というのは、本来は charité (神への愛) に対するものとして使われているのであり、「被造物への愛」をあらわしているからである。そしてキリスト教の方では、人間は原罪により、charité (神への愛) を見失い、concupiscence (被造物への愛) に満されるようになったと説明している。このように、concupiscence は charité に対するものとして使われているので、通常単数形として、表示するのが自然であろう。しかしこの concupiscence は、concupiscence de la chair (肉の欲)、concupiscence des yeux (目の欲)、orgueil de

la vie (生活のおごり) と三分されるのがならわしであるので、三つの concupiscence があるという意味では、それを複数形で表示することもあるのである。

passions (情念) と concupiscence (情欲) の関係を考える場合、もう一つ明らかにしておかねばならないことがある。それは passions をとりあつかう場合に、立場のちがいによって、passions のとりあつかい方がちがってくるということである。たとえばパスカル (Pascal) (1623—1662) は Pensées の中で、「人間の敵は自分の情念 (passions) である…」⁽⁴⁾、「人間の敵はバビロン人ではなくて、彼らの情念 (passions) である」⁽⁵⁾、「人間の敵は人間自身であり、人間を神からひきはなすのは、人間の情念 (passions) であると、イエズス・キリストは言いにこられた」⁽⁶⁾とくりかえしている。ここに見られる立場は、情念を悪しきもの、人間を神よりそらす悪しきものとする立場である。しかしその同じパスカルは Pensées の中で、これとはちがう立場をも表明している。

アブラハムは自分のために何ものも取らず、ただ従僕のためにのみ取った。そのように、義人も自分のためには世から何ものも取らず、世の称賛も取らず、ただ彼の情念のためにのみ取る。彼はみずから主人として自分の情念を使役し、その一つに「行け」と言い、他の一つに「来い」と言う。〈あなたはあなたの欲望を治める〉。このように支配された情念は、そのまま徳である。むさぼり、ねたみ、怒りは神でさえ自分の属性としておられる。そしてこれらは同じく情念である寛容、情け、誠実とともに、りっぱな徳である。われわれは

それらを奴隷として使役し、それらに食物をあてがい、その食物を魂に横取りされないようにしなければならない。なぜなら情念が主人になると、それらは悪徳になり、そのときには情念が魂に自分の食物を与え、魂がそれを食べて中毒をおこすからである。⁽⁷⁾

ここにはパスカルが別のところで展開した、*jour de* と *user de* の考えの反映が見られる。*jour de* というのは、それ自身のために愛着する態度であり、神に対してはかくあらねばならず、*user de* というのは、それを使用し、それにとらわれない態度であり、世間のことに対してはかくあらねばならないとする立場であって、パスカルはこれを聖アウグスティヌスよりうけついでるのである。⁽⁹⁾そして今、引用した情念に関する断章では、パスカルは、情念は *user de* すべきものであって、それぞれの情念がその所を得れば、それは徳となるという考えをのべているのである。

これと同じ考えはスノー（Senault）神父（1601-1672）の考えの中にも見られる。彼は *De l'usage des passions* の中で次のようにのべている。

それにもかかわらず、理性は恩寵の助けを得て、情念を有効に使うことができる。そして情念におもねるわけではないが、それに好意的に、輝かしい徳にかえることができないほど、軽蔑すべき情念はないと私は言いたい。墮落した自然からひきついだものを情念からとり去り、無垢の状態のときもついていた純潔さを、情念にかえしてやるのが、人にはできるのである。⁽¹⁰⁾

このように情念（*passions*）のとらえ方も、立場によって異ってくるのである。人はキリストも情念を持っておられたと言うし、人祖のアダムが神にそむいて、樂園から追放される以前にも、アダムの中には情念があったと言う。しかしその場合の情念は、それぞれ所を得て、清浄なものであったと考えるべきである。この情念は原罪以後混乱し、今我々が、我々の周囲にいたるところに見るようなものとなった。パスカルが「人間の敵は情念である」と言うとき、

それは原罪以後混乱したこの情念の姿をさしているものであり、情念を使い、それにとらわれなければ、情念を徳に転化できると、パスカルやスノー神父が言うとき、それは情念の別の姿、原罪以前のアダムに見られるような情念のあり方を予想しているのである。

これと同じことが、*concupiscence*（情欲）についても言えるように思われる。パスカルは父の死に際し、姉夫婦のペリエ（Périer）夫妻にあてた手紙（1651年10月17日付け）の中で次のように書いている。

神は二つの愛を与えて人間を創造した。その一つは神に対する愛であり、もう一つは自分自身に対する愛である。しかしそこには、神に対する愛は無限、すなわち神自身以外の他の目的をもたないものであり、自分自身に対する愛は有限で、神に帰するものであるというおきてがあった。

この状態の人間は、罪なしに自分を愛したし、罪なしに自分を愛さないわけには行かなかった。

その後、罪をおかしたとき、人間はこの二つの愛の最初のを失った。そして自分自身に対する愛は、無限の愛を容れることのできるこの大きな魂の中にただひとり残ったので、この自己愛は、神への愛が去ったあとの空虚にひろがり、満ちあふれた。こうして人間は自分だけを愛し、自分のためにすべてのものを、無限に愛したのである。

ここでパスカルは、我々が情念について見たような二つの状態を、*amour pour soi-même*（自己への愛）、*amour-propre*（自己愛）について見ているわけである。「自己への愛」は原罪以前にも存在した。すなわち、原罪以前には、「神への愛」は無限であるのに対し、「自己への愛」は有限で、神に帰するものとして存在した。先にのべた *jour de* と *user de* の区別を利用すれば、「神への愛」は神自身のために、無限に愛すべきものとして存在し、「自己への愛」は、これを使い、それにとらわれるべきではないものとして存在した。それ故樂園を追放される以前には、アダムはこのような姿で自己

を愛したのであり、それ故に罪におちいることなく、自己を愛することができたのである。しかし原罪以後、「神への愛」が去ったあとに「自己への愛」がひろがり、本来使うべきもので、とらわれてはならない「自己への愛」は、その役割を転倒して、神にのみ向けられるべき愛の姿をとるようになった。すなわち無限に自己を愛するようになったのである。これが原罪以後の *amour pour soi-même* (自己への愛)、*amour-propre* (自己愛) の姿である。そして *amour-propre* (自己愛) というのは、*concupiscence* (情欲) の別名であるから⁽¹¹⁾、我々は情欲についても、原罪以前と原罪以後の二つの姿を考慮することができると思う。ただ私の調べた範囲内では、*concupiscence* (情欲) という語は、その悪い面、原罪以後の姿をさすのに使われているので、このように言うにはやや抵抗を感じるのであるが。⁽¹²⁾

パスカルはまた別のところで次のように言っている。⁽¹³⁾

神は最初の人間を創造し、彼の中にすべての人間性をつくった。

神は人間を正しく、健全で、強壯で、
いかなる情欲 (*concupiscence*) もなしにつくった……

アダムは悪魔にこころみられて誘惑に屈し、神にそむき、そのおきてを破り、神から独立し、神に等しいものとなろうとした。

アダムは罪をおかし、永遠の死に値するものとなったので、

その反逆を罰するために、

神は被造物への愛の中に彼をとじこめた。

そして以前は情欲によって、被造物の方へひかれることのなかった彼の意志は、神ではなく悪魔がそこにまいた情欲で満された。

パスカルはここで、神は人間を、いかなる *concupiscence* (情欲) もなしに創造したと言っている。これは前に引用したペリエ夫妻への手紙の内容と矛盾しているように見える。手紙では神は二つの愛、神への愛と自己への愛を与えて、人間を創造したと言っている。そして自己への愛 (*amour pour soi-même*)、自己愛 (*amour-*

propre) は、情欲 (*concupiscence*) の別名であることを見たのであるが、ここではパスカルは、神はいかなる情欲もなしに最初の人間を創造したと言っているのである。しかし原罪以後、神への愛が去った後に、人間は神にのみ向けられるべき愛をもって自己を愛するようになったのであるから、いかなる情欲もなしに人間を創造したと言うとき、その *concupiscence* と言うのは、原罪以後の姿をさしていると見るべきである。そして原罪以後に見られるような情欲の姿を、神は最初の人間を創造したとき、彼に付与しなかったのだと解釈すれば、手紙の記述と矛盾しないことになるのである。自己への愛 (*amour pour soi-même*)、自己愛 (*amour-propre*) はまた、*cupidité*⁽¹⁴⁾とも *concupiscence* とも呼ばれたのであるが、パスカルはここではまたそれを *amour de la créature* (被造物への愛) とも呼んでいる。⁽¹⁵⁾ このように *passions* (情念) についての二つの姿を見たように、*concupiscence* (情欲) についても、その二つの姿を見ることができるのである。すなわち原罪以前の姿と、原罪以後の姿であって、後者は悪しきものとして、パスカルやボシュエ (*Bossuet*) によって非難されているものである。そして *concupiscence* という表現に出あう場合、悪しきものとして取りあつかわれているのが大部分なのである。

情念と情欲のそれぞれ対応する二つの姿、二つの相は以上のようなものであるが、情念と情欲の関係については、*Jacques Truchet* は次のように述べている。⁽¹⁶⁾

心理学的現実である情念 (*passions*) の基礎に、もっと深い、こんどは神学的現実である情欲 (*concupiscence*) を信仰は見わける。それは原罪から由来する全般的な傾向であって、すべての道徳的混乱の根源にみとめられるものである。ボシュエは情欲について一つの論文を書いたが、説教師となったのはじめから、彼はそれについての一つの定義を抱いていた。「この語を特定の情念をさすものとはとらず、むしろすべての情念の集合ととってほしい。聖書はそれを情欲と肉という全般的

な名で呼んでいるが、ここでは情欲という一語であらわそう。そして偉大なアウグスティヌスとともに、次のように言わう。情欲とは、創造主を無みして被造物の方へ我々を傾斜させ、永遠の財宝を無みして、感覚的事物の方へ我々をおしゃるものである、と。

ここには我々が最初にのべた点、情念を複数で表示し、情欲を単数で表示する理由ものべられているわけであるが、ここでは我々は、情念（*passions*）というのは、心理学的面からとらえられた呼び名であり、情欲（*concupiscence*）というのは、もっと深い神学的面からとらえられた呼び名であることに注目しておけばよいと思う。そして17世紀のフランスのモラリストたちは、我々の関心を神よりそらし、被造物へ向けさせるものとして、あるときはそれを情念と呼び、あるときはそれを情欲と呼んでいるのである。

フランスの17世紀は、ある面では、聖アウグスティヌスの世紀と呼ばれる。それほど聖アウグスティヌスは、パスカルやボッシュエなどの17世紀のモラリストや宗教思想家に影響を及ぼしているのである。聖アウグスティヌス（354-430）は古代末期に現れて、新しい中世をきりひらいた宗教思想家であるが、我々が今問題にしている情念や情欲にも言及している。情欲については、『告白』でくわしくのべている⁽¹⁷⁾、情念についても『神の国』その他でのべている。またスノー（*Senault*）神父（1601-1672）は1641年、*De l'usage des passions* をあらわし、フランスの17世紀における情念論の有力な旗手となったが、彼はその中でも情欲にふれている。しかしスノー神父の場合には、情念論のために、一書をささげているのであるから、情欲という神学的な面よりも、情念という心理学的面を強調した人であったと言えよう。スノー神父とほぼ同時代のパスカル（1623-1662）も、その著作 *Pensées* や *Écrits sur la grâce* その他で、情念にも情欲にも言及している。しかしパスカルの場合には、情念や情欲に一著作全体をささげ、体系的にそれらを論じているわけではなく、*Pensées* その他に散見される断片的な考察によって、

パスカルがそれらに関心をもっていたことがうかがえるのである。そして、パスカルが情念と情欲のうち、とくに後者に力を入れていることは、いろいろなパスカル学者が、パスカルと情欲（*concupiscence*）についてのべている点からも明かであろう⁽¹⁸⁾。ボッシュエ（1627-1704）も、情念にも情欲にも言及している。彼は *Traité de la concupiscence* という書物を書いて、情欲について論じているし、*De la connaissance de Dieu et de soi-même* の中では情念の問題にふれている。そして情欲論では聖アウグスティヌスの系統に立ち、情念論では聖トマスの系統を引いて、11の情念をあげている。

2. 情欲（*concupiscence*）論の系譜

新約聖書の聖ヨハネの言葉をとりあげ、それを組織的に発展させて、情欲論を築いたのは聖アウグスティヌスである。そして聖アウグスティヌスにより所をあたえた聖書の言葉は次のようである。

世と、世にあるものを愛するな。世を愛するなら、おん父の愛はその人のうちにはない。世にあるもの、すなわち、肉の欲（*concupiscence de la chair*）、目の欲（*concupiscence des yeux*）、生活のおごり（*orgueil de la vie*）などはすべて、おん父から出るのではなく、世から出る。⁽¹⁹⁾

聖アウグスティヌスはこれを発展させ、『告白』の中で三つの *concupiscence* について論じている。三つの情欲とは、聖ヨハネのあげている、肉の欲（*concupiscence de la chair*）、目の欲（*concupiscence des yeux*）、生活のおごり（*orgueil de la vie*）であるが、聖アウグスティヌスは『告白』の第十卷第三十章より、第三十九章までをこれにあてている。このうち「肉の欲」を論じた部分は、第三十章より第三十四章までであり、「目の欲」を論じた部分は、第三十五章と第三十六章第五十八節であり、「生活のおごり」を論じた部分は、第三十六章第五十九節より、第三十九章までである。

聖アウグスティヌスはさらにこれらを細分して、第三十章では肉欲の誘惑について、第三十

一章では食欲の誘惑について、第三十二章では嗅覚の誘惑について、第三十三章では耳の快楽について、第三十四章では目の誘惑について、告白し、論じている。これらは「肉の欲」のうちに含まれるものであるが、聖アウグスティヌスは、これらを神への愛よりそらすものとしてとらえている。たとえば、第三十四章の目の誘惑に関するところで、次のように言っている。

ところで目が愛するのは、美しいさまざまな形や、まぶしくきらびやかな色です。私の魂はこれらのものにとらえられてはならない。神にとらえられなければならない。神はこれらのものをまことに善きものとしてお造りになった。しかし私の善は、神ご自身であって、これらのものではない。⁽²⁰⁾

情欲の第二にあげられているのは、「目の欲」であるが、この表現については注意を要する。「肉の欲」がすべての感覚的快楽の楽しみに関するものであったのに対し、これは精神的、知的好奇心に関するものである。これが何故「目の欲」と呼ばれるかと言うと、聖アウグスティヌスも言うように、我々は「いかにきらめくかを聞け」とか、「いかに照らすかを嗅げ」とか、「いかに輝くかを味わえ」とか、「いかにまばゆいかを触れよ」とか言わず、「いかに光るかを見よ」と言う。このように目が認識の作用のうちで主位を占めているので、認識についての好奇心が、「目の欲」と呼ばれるのであり、これには、知識とか学問に対する好奇心がふくまれている。⁽²¹⁾このような外物に対する好奇心も、人の心を神よりそらす情欲として、聖アウグスティヌスによってとらえられている。

聖アウグスティヌスがあげている第三の情欲は「生活のおごり」である。聖ヨハネの手紙のこの部分は、「富のほこり」(orgueil de la richesse)と訳されることもある。聖アウグスティヌスにとっては「生活のおごり」とは、人の賞賛をむさぼる心、自尊心をさすものであった。彼は次のように言っている。

それつまり、人々から畏敬され愛されたいという誘惑です。それも、ほかの目的のためにではなく、まさにこの、畏敬され、愛さ

れることによるこびを感じるためです。しかしそれは、ほんとうのよろこびではありません。あわれむべき生であり、汚れた、からいばりにすぎません。あなた(神)を愛さず、心からあなたを恐れないということも、とりわけこの欲をもとにしておこってくるのです。(中略)

ところで私たちは、人間社会におけるその職掌柄、どうしても人から愛され畏敬されねばならない地位にありますから、真実の幸福に敵対する悪魔は間近に迫り、いたるところに畏をもうけて、「えらい、えらい」というほめことばをまきちらします。もし、そのほめことばをががつひろい集めているならば、いつの間にやら悪魔のとりことなり、よろこびをあなたの真理のうちにおかず、人間どもの欺瞞のうちにおき、「あなたのために」ではなくむしろ「あなたのかわりに」人から愛され畏敬されるのを好むようになり、このようにして悪魔に似た者になり、愛における一致のためではなく、刑罰のまきぞえをくらうためにその仲間となることでしょう。⁽²²⁾

このように聖アウグスティヌスは、聖ヨハネの言葉にしたがって、情欲を三つにわけ、人間を神への愛よりそらすものとして、それをとらえているのである。

聖アウグスティヌスの継承者であったパスカル(1623-1662)も、情欲を三つに分けている。彼は次のように言っている。

すべて世にあるものは、肉の欲(concupiscence de la chair)目の欲(concupiscence des yeux)、生活のおごり(orgueil de la vie)である。〈官能欲、知識欲、支配欲〉。⁽²³⁾

そして事物には三つの秩序があるとして、肉体(chair)、精神(esprit)、意志(volonté)をあげ、肉적인ものは富者、王者であり、肉体を対象とし、好奇心のある者と学者は精神を対象とし、賢者たちは正義を対象とする。そして、肉のことがらにおいては情欲(concupiscence)が支配し、精神のことがらにおいては好奇心(curiosité)が支配し、知恵のことがらでは、おごり(orgueil)が支配すると言っている。⁽²⁴⁾ここで情欲

(concupiscence)とされているのは、肉の欲 (concupiscence de la chair) のことであって、この語は三つの情欲を含めた広い意味で使われるだけでなく、狭い意味で肉の欲だけをさすために使われることもある。そして知恵 (sagesse) のことからではおごり (orgueil) が支配すると言うとき、パスカルの念頭には、異教的知恵、とくにストアの知恵のことがあったのであろう。そして彼は次のように言っている。

そして、知恵を授けるのは、神だけである。だから〈誇るものは、主によって誇れ〉と書かれている。⁽²⁵⁾

パスカルはこのように、聖アウグスティヌスの情欲論をうけつぎ、その情欲の三分法を自己のものとしているのであるが、この三つの情欲のうち、orgueil をとくに重視し、それに怠惰 (paresse) をつけ加えることがある。

我々の罪の二つの源泉は高慢 (orgueil) と怠惰 (paresse) であるから……。⁽²⁶⁾

この「怠惰」については、パスカル学者 Philippe Sellier は、それは「高慢」の疲れた顔であり、「怠惰の下には、優越欲の深い広がりがある。人は絶望の中でも例外的でありたいと願う」と言っている。⁽²⁷⁾

前にも見たように、concupiscence (情欲) というのは charité (神への愛) に対して使われる言葉であり、cupidité (貧欲) とともに、amour propre (自己愛) とともに、amour de la créature (被造物への愛) とともに呼ばれる。それは神への愛に対するものとして、被造物への愛を意味している。神はそれ自身のために無限に愛されるべきであり、被造物は自己をも含めて、これを用いるべきものであって、それにとらわれるべきではないにもかかわらず、原罪以後人間は神にのみ向けられるべき愛をもって、被造物を愛するようになった。原罪以後の情欲の姿について、パスカルは次のようにのべている。

そこで情欲は彼の四肢に上り、悪の中で彼の意志をくすぐり喜ばせた。そして暗闇が彼の精神を満したので、以前は善の中でも悪の中でも、喜びや快感を感じることなく、善悪に無関心で、自分の側からの欲望なしに、自

分の幸福にもっともふさわしいと知っていることに従っていた彼の意志は、今やその四肢に上った情欲に魅せられた。そして強く、正しく、明るかった彼の精神は暗くなり、無知の中にとりのこされた。

この罪はアダムから、悪い種子から出る果物のように、アダムにおいて墮落したすべての子孫に移ったので、アダムから出たすべての人は、無知と情欲の中に生れるのであり、アダムの罪のため有罪で、永遠の死に値するものとなった。

自由意志は依然として、善にも悪にも向うが、そこには次のような違いがある。すなわち、アダムにおいては悪への快感はなく、善に向うためには善を知るだけで十分であったのに、今では自由意志は、情欲によって、悪の中に強い甘美さと喜びを感じるので、善に向うように、自ら悪へおもむかざるを得ず、すすんで、自由に、喜びをもって、至福を感じずる対象であるかのように、悪をえらぶのである。⁽²⁸⁾

このように、人祖のアダムが神にそむいたために、人間は神への愛を見失い、情欲の支配する悲惨な状態におちいった。しかし人間には、原初の幸福、神の命令にそむく前に、アダムのおかれていた楽園の幸福の記憶が残されており、これをたよりにして、以前の幸福へもどろうとするが、それは人間の力だけでは不可能であり、神の恩寵 (grâce) が必要であるとパスカルは説くのである。キリストは、人間をこの情欲の支配から解放するためにこられたのであり、キリストを信ずることによって得られる神の恩寵によって、神への復帰が人間には可能になるのである。この神の恩寵が情欲の支配下にある人間に対してどのように働くかについて、パスカルは次のように書いている。⁽²⁹⁾

選ばれた人々を救うために、神はその正義を満すべく、そのあわれみによって、贖いの恩寵、治癒の恩寵を得させるべく、イエズス・キリストを送った。その恩寵とは、神のおきての中での甘美な喜びにほかならず、聖霊によって心の中にひろがるものであり、肉の欲

に等しいだけではなく、それを越えるものである。情欲が悪の中で提供するよりもっと大きな善の喜びで、意志を満すのである。こうして自由意志は、罪の魅力よりも、聖霊がふきこむ甘美な楽しみに魅せられて、そこにより以上の満足を見出し、美と幸福を感じるといふそれだけの理由で、神のおきての方をあやまつことなく選ぶのである。

そして以上のべてきたことが、「すべての信仰は、イエズス・キリストとアダムにおいて成りたち、すべての道徳は情欲 (concupiscence) と恩寵 (grâce) において成り立つ³⁰⁾」とパスカルの言う理由なのである。

パスカルと同様聖アウグスティヌスの影響を強くうけたボシュエ (1627-1704) も情欲をとりあげ、*Traité de la concupiscence* という書物をあらわしている。彼はこの中で、「世と、世にあるものを愛するな…」という聖ヨハネの言葉³¹⁾にたえず立ちもどっている。しかし聖アウグスティヌスの告白的調子、パスカルの思索的調子と異り、彼はすぐれた説教師として、この世を暗くする情念、情欲をはげしく弾劾している。

地に禍あれ、地に禍いあれ、もう一度言うが地に禍いあれ。そこからはたえず濃い煙、暗い情念からたちのぼり、天と光をかくす黒い蒸気がでているのである。そこからはまた人類の腐敗にたいする神のさばきの、稲妻と雷火もでているのである。³²⁾

そして三つの情欲のうち、もっとも根元的なものとして生活のおごり (*orgueil de la vie*) をあげ、この *orgueil* は、それに対する治療薬それ自身をも誇りに転化するものとして、すなわち人間の悲惨さに対する認識そのものまでを自己の誇りとするものとして、³³⁾ 悪の原理であるとしている。

しかし聖ヨハネは、我々がすでに亡びているのを見て、一步一步、肉の欲から精神の好奇心を通り、すべての悪の根源へとさかのぼる。その悪の根源とは生活のおごりなのである。³⁴⁾

以上情欲論の系譜のあらましを見てきたので

あるが、これはあくまでもあらましであって、ここにもれている人々の意見を検討し、この論文の内容を補強することには、他日を期したいと思う。

(註)

本文中に引用した訳文の中で、聖アウグスティヌスの『告白』よりの引用は、山田晶訳『告白』(世界の名著)により、パスカルの『パンセ』よりの引用は、前田、由木訳『パンセ』(世界の名著)を、少しく変更して借用した。邪欲とあるのを情欲とかえたたぐいである。パスカルよりの引用のページ数は、*Pascal, oeuvres complètes (l'Intégrale)* のページ数を示し、また『パンセ』の断章番号も同書によった。

- (1) *concupiscence* を「情欲」と訳したが、それは次の理由による。新潮国語辞典の「情欲」の項には、①仏教用語として、物をむさぼり、執着する心。②恋愛の情。③性的な欲望、性欲、色情という意味がのっている。*concupiscence* という語は、内容的にこれらの意味に非常に近いので、「情欲」と訳した。
- (2) Etienne Gilson, *Saint Thomas moraliste*, P. 120
- (3) ヨハネの第一の手紙 2・15-16
- (4) Pascal, *Pensées*, 260-678
- (5) *ibid.*, 270-670
- (6) *ibid.*, 433-783
- (7) *ibid.*, 603-502
- (8) *ibid.*, 502-571
- (9) Philippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, P. 152
- (10) Jean François Senault, *De l'usage des passions*, préface.
- (11) Philippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, P. 141
- (12) パスカルは Périer 夫妻への手紙の中で、原罪以前の自己への愛をあらわすために、*amour pour soi-même* という言葉をつかい、原罪以後のそれをあらわすのに、*amour-propre* という言葉をつかっている。*concupiscence* という言葉は被造物への愛をあらわし、悪いものとの印象が強いので、原罪以前のそれをあらわすのに *amour pour soi-même* か、それに類した別

- の言葉を使った方が良くかもしれない。
- (13) Pascal, *Ecrits sur la grâce*, P. 317
 - (14) Philippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, P. 141
 - (15) Jean Mesnard, *Les pensées de Pascal*. P. 142
 - (16) Jacques Truchet, *La prédication de Bossuet*, Tome 1, P. 232
 - (17) アウグスティヌス、『告白』第十卷第三十章より第三十九章まで。
 - (18) Jean Mesnard, *Les pensées de Pascal*. Philippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, その他。
 - (19) ヨハネの第一の手紙 2・15-16
 - (20) アウグスティヌス『告白』第十卷第三十四章第五十一節
 - (21) 同書、第十卷第三十五章第五十四節
 - (22) アウグスティヌス、『告白』第十卷第三十六章第五十九節
 - (23) Pascal, *Pensées*, 545-458
 - (24) *ibid.*, 933-460
 - (25) *ibid.*, *Pensées*, 933-460
 - (26) *ibid.*, 774-497
 - (27) Philippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, P. 186
 - (28) Pascal, *Ecrits sur la grâce*, P. 317-P. 318
 - (29) *ibid.*, P. 318
 - (30) Pascal, *Pensées*, 226-523
 - (31) ヨハネの第一の手紙 2・15-16
 - (32) Bossuet, *Traité de la concupiscence*, chapitre IV
 - (33) *ibid.*, chapitre XXIII
 - (34) *ibid.*, chapitre XXVII